

短 信

会長短信

小 野 哲

今回は最後の会長短信ということになります。次期会長の政さんに、取りあえずはなむけの言葉を、と申しますのは若返りはまこと翔友会のあらたな慶事ですから。

それで翔の字の謂われを思い起こすことが相應しいかと、80歳になろうとする年寄りの知恵ですが思い立ちました。翔の字の発端は勿論、亜細亜の古代中国の黄河上流の森林と草原の遙かな起伏とおそらくは清明の大気の中の風物に縁起するでしょう。

羽を拡げたまま上下にはばたかず左右思うままに宙に輪を描き、また輪を描いて飛び続けるさま、それも一羽よりは数羽さらに数多く、数えきれないほどの飛鳥の群れ、宙空に輪を描いて回る飛鳥のすがたを羊と羽の漢字で、ふるい書体の隸書体では、羊は羊であり、羽は羽で軽くやわらかでし

なやかに空中に浮かぶのも不思議でないことを表そうとしたのでした。

ソアラがテルミックを探し当てて、その中を賢明に懸命に飛び続けるさまは思い出の中でさえ感動的で、私はたびたび其処で目をさましたものです。ゆめのなかでさえバンク旋回は感動的です。

古代の仙人は醒めたままに翔んだのでしょうかソアラの回翔は翔の字の現代の字体そのもの。

さて古代の政の賢人の孔子さまは、翔而後集と申されました、ということになっております。意気の合った自由鳥人の一団は、自在に回翔し、回翔をかさねて機を見て一斉に下り集まります。不思議な合図があって、一斉に翔し一斉に集合。

ソアラに現実に乗るひとも夢に乗る私のような者もみんな翔友。10米の台から飛んでも翔友。新会長の政さんと翔友に栄光あれ。

部長 短 信

山 口 博 司

人は、生まれながらにして「飛びたい」という欲求があります。私は田舎で育った人間で、春のレンゲ畑に寝転んで、空を見上げ、飛ぶ鳥をずっと見ていた記憶があります。広がる空とレンゲ畑が少年の心に時空を越えて刻まれています。このたび、航空部の部長を仰せつかり、何か、私自身の記憶の一端が、今、現実につながるような気がいたしております。自分の意志で、空を飛ぶと言うことはすばらしいことです。また、このような経験は、ほんの一握りの人に許されたもので、その意味でも、皆様は幸運な人々であります。出来る限り、皆様の貴重な経験を多くの人々、特に同志社に学ぶ学生にお伝えください。

グライダーは、他に類を見ないスポーツです。機体構造は工学そのものですし、飛行は流体力学理論によるものです。私は、工学部の機械系学科で流体工学を担当してまいり、これらグライダーに関する工学的な視点では、大変身近に感じます。ただし、実際に飛ぶとなればたいへんな苦労が要することは、これまた十分に認識いたしております。すなわち、単に技と体力のみならず、工学、理論、技、精神力そして体力といった、いわゆる総合スポーツであると思っています。また、この他、グライダーで飛ぶのは一人もしくは二人と言うことになりましたが、実は、これを飛ばすには大変多くの人々の支援が必要になります。すなわち、個人競技的な特長を持つスポーツでありながら、実はグループスポーツの要素が非常に大きい。また、他と比べると、比較にならないほど広大なスポーツ環境が必要となる。と、言った具合に、パイロットはたいへんな試練と責任を背負って飛ぶことになります。それだけに「うまく飛べる」と言う達成感は大変大きいものがあると思

います。いっぽう、スポーツを行う人は、ただ苦労ばかりでなく、「これほど楽しい事はない」と言う実感を持つことが出来る、それがまた重要な事であると思います。このような意味でも、多くのグライダー経験をもつ翔友の皆様が、楽しみということについても語っていただければよいと思います。

すばらしいチャンスを与えられた航空部の皆さんと共に、何かと、私も勉強とまた経験を積んで行きたいと願っています。これからの、同志社大学航空部に対して、翔友皆様のご支援とご協力を切にお願い申し上げます。

<山口先生の横顔>



卒業年次・学科

1977年工学部機械工学

1979年マンチェスター工科大学 修士

1992年 同 上 博士

家族構成 奥様、お嬢さんお二人と愛犬一匹(プードル、オス)

担当講義 流体工学、流体力学、機械設計

研究分野 電磁性流体の基礎と応用、粘弾性流体の挙動

趣 味 クラシックカメラ (ただし、写真は下手)、旅行、クラシック音楽

監督短信

森 川 泰

時が経つのは早いもので、監督に就任させて頂いてから一年が過ぎてしまいました。皆さんはこの一年をどの様にお過ごしになられたでしょうか。私自身、この一年を振り返ってみて、一体、監督として何が出来ただろうか、と自問自答してみました。率直に言えば、目に見える形で成果を上げることは出来ませんでした。ある意味、結果を出すことが要求される体育会航空部としては問題であるかもしれません。しかし、この一年が無駄であったかという、そうは思っておりません。この一年私なりに努力をし、私の考えている同志社航空部に向けて動き出すことが出来ました。翔友会幹事会の皆様とお話をして私の方針に対してご理解を頂きましたし、山口コーチをはじめとする指導陣にも理解してもらい、協力しながら現役学生を指導して行ける土台を作ることが出来たと確信しております。ただ残念ながら物理的に距離が離れている為に現役学生諸君と十分にコミュニケーションが取れていないというのが実感です。今年はこの辺りの問題を解決して行かねばならないと考えております。その為には学生諸君の我々指導陣への積極的なコンタクトと関西に在住の若手を中心としたOBの協力が欠かせません。改めてOBの皆様のご協力をお願いしたいと思います。

さて、ここでクラブの現況及び今年度のことについて触れておきましょう。この4月から新2年生以上の学生は5名となります。今、クラブにとって最重要課題は部員増加で、最低5名以上の入部を目指しており、この原稿を皆様をご覧の頃には学生諸君の努力により良い報告が出来ると思っております。この様にクラブの土台を充実させた上で、今年各競技会で戦うことが出来るレベルに選手を育成して行きたいと考えております。結

果として成績はどうかであり、単に大会に参加するだけではなく、持てる力を出し切って戦える選手を、と思っております。一方、航空部を取り巻く環境は大きく変化して来ており、同立戦に関する事など問題は山積しております。学生諸君及び我々指導陣とOBが積極的に取り組まなければなりません。ただ、心強いのは、現場に復帰して頂けるOB教官や再び飛ぼうとしている積極的なOBの方のお話を耳にしていることです。

最後に、確か昨年のサッカーのワールドカップの頃に見かけた記事について触れさせて頂きたいと思えます。そこにはイングランド代表のオーウェン選手の話が載っておりました。彼曰く、シュートが入らなくなると、どこが悪いのかとあれこれ考えては色々な答えを出す。しかし、だいたいその答えは間違っている。だからあたふた悩んでもしょうがなく、自分の力を信じてやるべきことをやり続ける self belief が大切である。結果はそのうち付いてくるもので、そうやって結局はスランプを切り抜けて来た。この様な考え方は心理学的にも裏付けられていると書いてありました。特にやるべきことをやる。自分に自信を持ち、目の前にことに囚われずに本質を見据えてやるべきことをやる。こういう肯定的な考え方は非常に大事で、今の我々に必要なことではないでしょうか。我々の場合も、フライトにしてもクラブ運営にしてもうまくいかないからといって場当たりの対応をするのではなく、長期的な目標に向かってやるべきことを信念を持って一つ一つやって行く。同志社大学航空部は70年近い歴史を、学生諸君は約20年という自分の歴史を持って現在に至っているのです。自信を持って着実に今年度も一年間、頑張ってください。